

ワケ カタチには理由がある(21)

～中島海軍双発戦闘機「月光」21型(丁1N)



[↓零戦との比較]



中島飛行機の海軍双発戦闘機です。初飛行は1941年で、太平洋戦争開戦直前です。1930年代後半から世界で双発戦闘機ブームが始まっていましたが、遅れて日本海軍もそれを手に入れることができました。研究熱心な中島飛行機の機体らしく、ファウラーフラップや可動式の前縁スラットを採用し、失速特性を改善させることで、設計時、空戦性能についての、それなりの勝算があったのかもしれませんが、やはり単純な戦闘機として単発戦闘機の敏捷性に適うはずもなく、結局、先輩の双発戦闘機たち、例えばドイツのBf110、イタリアのBr88、英国のホワールウィンドと同じ道を辿りました。同一スケールの零戦と並べた写真を示しますが、両者を比較すれば明らかで月光は零戦に比べて二回りも大型の機体で、いくら馬力が二倍になったとしても(両者とも同じ栄エンジンを搭載)、零戦には勝てなかつただろうことには納得がいきます。個人的に本機体の最大の謎は機首先端の透明窓で、子供の頃はここが光って闇の中の敵機を照らすのかと想像していましたが、実際は整備の際の明り取りだそうで、秘密兵器が隠されていたわけではありませんでしたw。

【模型について】

フジミ(Fujimi)製 1/72 のインジェクションキットです。このスケールでは、大昔はレベルのキットしかありませんでしたが、フジミのキットは背中に段差の付いた型も含めて一連のバージョンで発売され、標準以上の出来です。主翼の前縁と後縁を切り離して、ファウラーフラップと前縁スラットを稼働状態に改造しています。前縁スラットは、外側と内側の可動域が異なるため(外側部7cm、内側部15cm)、段差を付けています。(中川裕幸 2021年4月)